

左官工 山口徹

壁仕上げのスペシャリスト「左官工」。砂・水・セメントを適切な配合で混ぜて「モルタル」を練り、それを鏝で塗り込めて凹凸のないめらかな表面を創り出す。工程の大部分を職人の感覚に頼る。この職種の需要は、時代が変わっても絶えることはない。

「左官屋一家」に生まれる

左官工・山口徹は、父親が何人も職人を束ねる左官の親方だったこともあり、小さいころから大勢の職人に囲まれて育った。

「だから、誰に言われたというわけでもなく、めざすというよりも何も考えずに気づいたらなっていたとか。工業高校の機械科だったんで、卒業時に車の整備士とかも考えたことはありますけど、結局この仕事を選んでましたね」

子供のころ、家に置いてあった左官の道具がおもちゃや代わりだったという山口は、まさにな

るべくしてなった左官職人なのかも知れない。

「左官って、後ろから一緒に鏝を持って『こうやって塗るんだよ』って教えるようなものじゃないんですよ。親方でも先輩でも、うまい人がやるところを見て覚えるしかない。教えてもらったのは材料の練り方とか基本的なことだけで。そういう意味では、小さい時から現場で遊んだりして、職人さんの仕事を見てましたから。もちろん、実際に自分でやるようになってからの経験とか応用も大事ですけど」

高校卒業後、父が所属する株式会社浪花組に入社した。

「昔からこの世界で『三年たったら見習い終了』っていうのがあって、実際三年くらいじゃまだまだ技術は身につかないんですけど、それでも一応一人前として扱われて、壁を塗らせてもらえるようになるんです。自分の場合は平成八年入社なので、平成十一年あたりから鏝を持つてますね」

「表に出ない仕事が多い」左官工事の現状

山口の現在勤めている現場は、新宿区で建設

KEEP

守り、伝えること

左官の技は手取り足取り
教えてもらうものじゃない。
見て、やって覚えていく



左/梁下の補修工事。現場でつくった梁と現場でつくる梁をつなぐ部分で、つなぎ目をうまくならして目立たなくするのも左官工の技術だ。中/完成すると山手線内で最も高いマンションになる西富久地区第一種市街地再開発事業。これから躯体工事が本格化すれば、左官工である山口の活躍の場も増えていく。
右/左から、戸田建設・芦田作業所長、浪花組・富永職長、山口、戸田建設・瑞慶山建築係員。山口はまだこの現場に入って間もないが、いずれは職長に、と期待されている。



現場のプロフェッショナル KEEP & CHANGE

中の超高層マンション。コンクリートの壁や柱にモルタルを均等に塗り、補修する作業が中心だ。作業所長の戸田建設・芦田哲は、「鳶、型枠、鉄筋、そして左官、この『躯体四役』がうまく連携してくれば建物は順調に出来上がっていく

きます。山口さんは、その四者の間を取り持つてくれる潤滑油のような役割」と期待を寄せる。左官といえば、かつては「聚楽壁」「珪藻土」そして「漆喰塗り」といった伝統的な技を駆使する職能だったが、ビル・マンションといった

大規模な建設現場ではそういった手間のかかる仕事はかなり減ってきている。

「内装工事とか商業施設とかで、たまにあるくらい。ほとんど『表に出る』仕事がないんですよ。だいたいがタイルの地下づくりとかで…」

「一番大変だったのは、ある程度仕事を覚えて任されるころ、四、五年目のころですかね。頭の中ではできているのに腕が追いつかない、腕が伴わないとき。仕事を始めたころよりむしろ悩みました。最初は材料を練ったりとか言われたことだけやってればよかったのが、いざ自分でやるとなると途方に暮れちゃうというか」

以前と比べると壁の塗り厚が減り、モルタルも水を混ぜるだけで簡便にできるものが市販されているため、「材料を練る」という役割自体もほとんど必要なくなりました。今は若手にもすぐに壁を塗らせているという。

「生き物」であるモルタルを使いこなす

壁や床などが平らに仕上げられていない状態を「不陸」と呼ぶ。熟練職人が手がけた壁は、塗った直後はもちろん、モルタルが乾いた後も「不陸」やひび割れが全くない。

「塗る場所によって違ったり、夏と冬でも仕上げ方が違ったり…僕はモルタルのことを『生き物を扱ってる』って言ってるんです。夏は

すぐ乾くし、冬はなかなか乾かない。材料の練り方も塗る方法もいろいろ変わってくる」

建物正面の壁と、側面の壁。一日中陽が当たる壁と日陰の壁。ダウンライトで照らされる壁と暗がりの壁。同じような仕上げ方は通じないし、そこを担当する職人の技量にも左右される。

「鉄筋や大工さんと違って、『答え』がないんですよ、左官の仕事って。その場所や周囲の状況を見て、何通りもある中から自分の判断でやり方や精度を決めなきゃならない。極端な話、完全にまっすぐじゃなくても、ちゃんと商品としてモノになっていけばいいっていう考え方」

「塗る技術だけならある程度やれば身につけられる。でも今の左官には、毎回違う仕上げや段取りをその都度自分で考えて工夫する、応用力が求められると思います」



左/柱表面の仕上がりをチェックする。「2mmと言われれば2mmで、1cmと言われれば1cmで塗れます。これはもう感覚としが言いようがないです」
右/狭いところ、広いところ、隣の建物との隙間…塗る場所によって無数の鏝を使い分ける。



やまぐち・とおる◎1977(昭和52)年、埼玉生まれ。左官親方の父を持ち、職人仕事を間近で見て育った。高校卒業後、左官工事を専門とする株式会社浪花組に入社。ビル・マンションなどの現場で、時に20人近い職人を束ねる職長となり、他職との調整や工程・品質管理の面でも重責を担う。左官1級技能士。

CHANGE

応じ、変えること

「左官には、自分で方法を考える『応用力』のある人が向いている」